



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語イブニング・コース中間報告
Author(s)	山下, 好孝; 本間, 淳子; 田中, 里実
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 14, 15-32
Issue Date	2010-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46740
Type	departmental bulletin paper
File Information	JISC14_002.pdf



日本語イブニング・コース中間報告

山下好孝・本間淳子・田中里実

要 旨

本稿は、2010年度秋学期期間（2010年10月～2011年2月）に北海道大学留学生センターにおいて実施されている「日本語イブニング・コース」の活動内容と実績についての中間報告である（10月・11月分）。日本語イブニング・コースは、北海道大学の留学生・外国人研究員およびその家族を対象とし、留学・研究生生活がスムーズに遂行されるよう日本語のクラスを提供するものである。特徴としてあげられるのは、1）日本語クラスの内容を企画・実施するインストラクター（学習サポーター）が、北海道大学の学部学生・大学院生らであること、受講者は、2）まずプレ・クラスに参加してイブニング・コースのプログラムに慣れ、その後、3）インストラクターが企画したグループ・レッスンを選択するか、あるいは、4）インタビュー・タイムに参加するという形式である。またグループ・レッスン終了後にアフター・セッションとして交流を深める参加者の姿も見られる。10月と11月の二ヶ月間で、延べ参加人数は560名（受講者330名・インストラクター230名）、グループ・レッスンの実施時間数は78.5時間であった。

【キーワード】 プレ・クラス インタビュー・タイム アフター・セッション コースの柔軟性 北大リピーター

1. イブニング・コース設置の経緯

北海道大学における留学生数は、2010年度に1400名を超え、今後もますます増加の予定である。国の施策としての「留学生30万人計画」が進められているが、これは1983年に策定された「留学生10万人計画」とは性格の異なるものである。後者は、国際貢献の一環として策定され、今世紀初頭に達成された。その後、新たに提案された「留学生30万人計画」は、少子高齢化を迎えた日本が労働者不足と直面する際に、日本の高等教育機関を修了し、日本語・日本文化を理解した学生たちに、その問題解決の一助と

なってもらふことを念頭においている。そのような状況下での日本語教育は従来のものと同じで良いはずがない。

北海道大学における留学生の特徴として、過半数が男性、全体の約6割が医学、歯学、理学、工学等の理系学部・研究科に在籍し、また全体の約7割が大学院の在籍者であることが報告されている（青木・高橋2009）。大学院生は比較的年齢層が高く、約半数以上が既婚者で、家族帯同者の割合も高い。医系では47.3%、理系で20.2%、文系で6.7%の学生に子どもがいることが報告されている（北海道大学留学生センター留学生指導専門委員会2009）。

北海道大学正規の留学生・外国人研究員には、留学生センターの「一般日本語」科目¹⁾が、またその家族のためには、北海道大学国際婦人交流会が主催するボランティア日本語クラス「日本語サロン」の授業²⁾が提供されている。しかし、留学生の増加とともに、それらの開講時間には受講できない留学生や、子どもの世話などで昼間の時間帯には参加できない留学生の家族が多くなっている。また、博士課程在籍者・研究者の家族（夫人）たちは、滞日期间が3～5年の長期に及ぶ場合もあるが、「日本語サロン」は、入門・初級の2期間のみであるため、初級後半以上の日本語力を身につけたいと考える家族たちには、学ぶ場所が十分には提供されていない。それらの学習者の需要に対応し、北海道大学での留学・研究生活がスムーズに遂行されるように、2010年度後期に「日本語イブニング・コース」の開講を提案した。

以下に、「日本語イブニング・コース」の10月・11月の期間についての詳細を述べる。

2. コースの概要

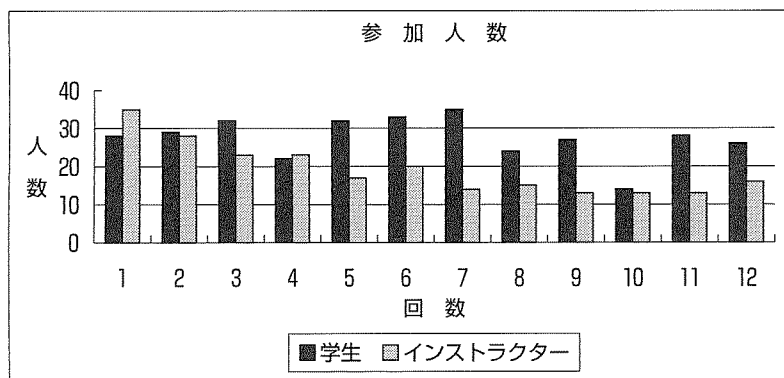
「日本語イブニング・コース」は、2010年10月5日に開始され、2011年2月までを開講期間と予定している。10月・11月の前半2ヶ月間に、延べ参加人数は受講者330名・インストラクター（学習サポーター）230名（合計延べ参加人数560名）であった（表1）。参加人数の推移は図1のとおりである。

この期間に実施されたグループ・レッスンは78.5時間（プレ・クラスを含まない）であった。受講者は、上述のように、日本語学習機会が限られている留学生・研究員、および、その家族であるが、「一般日本語」科目

表1：イブニング・コースの参加人数（10月・11月分）

		学生	インストラクター	計
1	10月15日	28	35	63
2	10月19日	29	28	57
3	10月22日	32	23	55
4	10月26日	22	23	45
5	10月29日	32	17	49
6	11月2日	33	20	53
7	11月9日	35	14	49
8	11月12日	24	15	39
9	11月16日	27	13	40
10	11月19日	14	13	27
11	11月26日	28	13	41
12	11月30日	26	16	42
小 計		330	230	560

図1：イブニング・コースの参加人数の推移



を履修中の学生も受け入れた。また、近年、著しく増加している帯同家族の子弟の参加もあった。一方、インストラクターは、北海道大学の学生・院生・職員を中心として幅広く募集を行った。日本語教育を目指す学生・院生らと日本語ボランティアグループの人材活用も図られ、ネットワーク化も視野に入れた。コース開始前に行われたインストラクターの説明会には、総勢46人の参加があり、コース開始時には35人がインストラクター希望者として参加した。

3. 活動内容

続いて、イブニング・コースに特徴的な活動である「プレ・クラス」と「インタビュー・タイム」について紹介する。

3.1 プレ・クラス

プレ・クラス担当者（山下）は、1992年より北海道大学留学生センターに勤務し、また、札幌市内外の日本語ボランティア教室の参加者とも交流の機会を多くもってきた。日本語ボランティア教室をめぐる様々な悩みとしては、「適切な教材がない」、「学習者が継続して来ない」、そして何にも増して、「コース開講中に新たな希望者が間断なく現れる」ことがあげられる。最善の対応策としては、クラス数を増やしてレベルを細分化し、新たな受講生に対応することであろうが、ボランティアグループの人的リソース・教室・時間などが十分であることはない。この問題は、ボランティアグループに限らず、あらゆる日本語教育機関に共通している課題でもある。

北海道大学留学生センターでは、2008年度より8週間単位のクォーター制度を導入した。これは、従来の前後期のセメスターの学期途中に渡日する日本語受講希望者（初級者）をスムーズに受け入れることをめざしたものである。しかし、クォーター制度の導入後にも、コース開始後2週間に新たな受講希望者が現れたり、コース終了間近に渡日の連絡が来たりする。このような受講希望の学生たちに十分対応するためには、絶えず、新しい学生を受け入れるシステムが必要であると痛感した。さらに、可能な限り低額のコストで実施するための方策は、筆者自身の長年の課題でもあった。

そこで、今回、日本語イブニング・コースの開講にあたって導入したのが、「プレ・クラス」である。イブニング・コースに登録した受講生は、まず1回約1時間程度、プレ・クラスに参加することになる。プレ・クラスは、留学生センターのラウンジで行われる。一端にプロジェクターのスクリーンを設置し、その前に、二重の長円形を描くように、向かい合わせにイスを配置した。内側のイスには受講者が、外側のイスにはインストラクターが座る。18時の開始前から受講者が徐々に集まり始め、19時近くまで三々五々、受講者が集まってくる。出席は参加要件ではないため、誰がいつ参加するかは未定である。

プレ・クラスは、全く日本語を学習した経験のない学生にも参加できる

アクティビティから始められる。たとえば、スクリーンに数字を映し出し、日本語の基本的な発音を練習する、絵を映し出し、物の名前を覚えるなどの活動である。また、受講者の緊張をとりのぞくために、「タッピング・タッチ」³⁾という技法を取り入れて、2人組みになり、相手の肩を軽く叩きながら、数字を数えていく練習も行った。これらの活動を通じて、どの受講生がリアル・ビギナーかが、外円に座って学習者を観察しているインストラクターにとって明らかになる。プレ・クラスの様子を写真1、プレ・クラス前に受講者が名札を受け取る受付の様子を写真2に示す。

写真1：プレ・クラスの様子

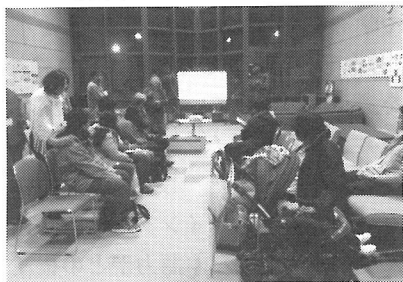


写真2：受付の様子



次には、ひらがなカードを使った活動がある。この段階になると、ひらがな未習者はついてこれなくなり、インストラクターの中から、ひらがな未習者に対するクラスが提案される。これらの受講者とインストラクターは、ラウンジから小教室へ移動する。プレ・クラス開始後の30分、18時半ごろになると、各受講者は自分のレベルに合ったクラスに移動していく。

ラウンジでは、ひらがな既習者を対象として文法知識が必要とされる活動が始められる。たとえば、動詞の辞書形とその動作を組み合わせたTPR (Total Physical Response) などである。また、歌の練習も行われた⁴⁾。

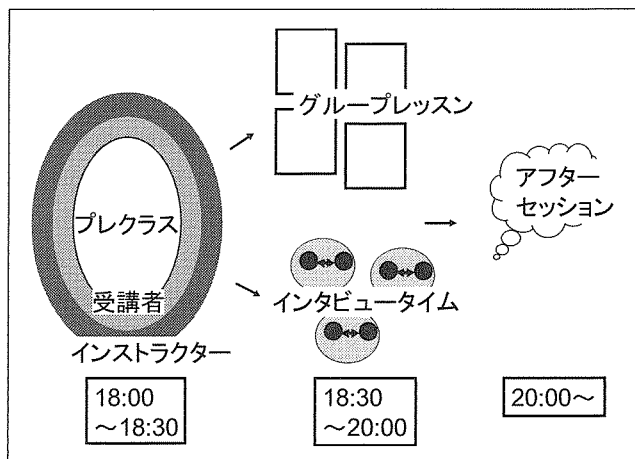
通常、歌の指導というと歌詞カードを配布することを想像されるだろう。プレ・クラスでは、「ひらがな一文字（単ひらがな）」のみをスクリーンに投影し、受講生が発音する。次に、文節ごとに区切られた歌詞を提示し、意味が明らかにされる。ここで、プロジェクターのスピーカー機能によって、準備された歌が紹介される。最後には、歌詞全体をふりがな付の漢字仮名交じり文で提示し、全員で一緒に歌う。

プレ・クラスは、あくまでも受講者のメンタル・ケアを兼ねた活動であり、日本語プロパーの活動ではない。北海道での訪れの早い冬を、国を離

れた留学生・研究員らが仲間と過ごす場所としても提供しているのである。特に、新たに渡日した受講者にとっては、同郷者と知り合う場であり、また、他の受講者と情報を交換する場ともなっている。

プレ・クラスは19時前後に終了し、各グループ・レッスンに移動する受講者も多い。しかし、それを決めかねている受講者のために、「インタビュー・タイム」を設けている。インストラクターたちが、受講者との交流も兼ねて、日本語でインタビューを行うというものである。特に、イブニング・コース開始直後は、個別グループ・レッスンが開講されていなかったこともあり、インタビュー・タイムは盛況であった。日ごろ、外国人と接する機会のない北大の事務職員や学部生たちは、当初、英語力を不安に感じ、萎縮しているようであった。しかし、受講生たちと話すうちに、日本語や英語を交えた会話が終了時間を過ぎてでも続いていることが観察された。各グループ・レッスンが多数、提案されると、インタビュー・タイムに参加する受講生もインストラクターも少なくなった。しかし、このような交流の場を設けることにはいくつもの意義がある。インタビューを通じて、受講者がどのようなコースを望んでいるのか、日本語力がどの程度であるのかといった情報を得る格好の機会であった。当初、暫定的に始められたイブニング・コースのこのフォーマットは、その後も継続されている。図2はこのフォーマットを図示したものである。

図2：イブニング・コースのフォーマット



受講者の中には、ひらがなを覚えられずにプレ・クラスに参加し続けて

いる学生もいる。正規の一般日本語クラスでは教室の隅で小さくなっている学生も、イブニング・コースでは、リラックスして、ミスを恐がらずに大きな声で練習している。イブニング・コースは、あくまでも正規のコースとは異なる位置づけなのである。留学生・研究員の数が増加し、教職員の目が届きにくくなった今日、必要な活動であると考ええる。

イブニング・コースの初年度の活動は、2011年2月までの予定であるが、その間、いつ新しい学生が参加してもいいように、プレ・クラスは常時開講の予定である。

3.2 グループ・レッスン

グループ・レッスンとは、参加しているインストラクターが個々に提案し、5名以上の受講者が集まった場合に成立するものである。写真3はグループ・レッスンを提案するインストラクターの様子、写真4、5はレッスン提案書の掲示板とそれを見ている受講者の様子である。

写真3：レッスンを提案するインストラクター



写真4：レッスン提案書の掲示板

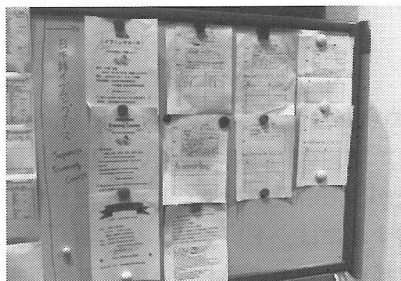


写真5：写真4の掲示板を見る受講者



グループ・レッスンを担当するインストラクターには、1時間半1500円の謝金が払われている。10月・11月期には、北海道大学の学部生・大学院生、

また日本語レベルが上級の留学生らによって、以下のようなクラスが提案された。『やさしい日本語の歌』、『中国人のための日本語』、『韓国人のための発音クラス』、『日常生活のための会話』、『ひらがなカタカナ書き方教室』、『映画で学ぶ日本語表現』、『小学生クラス』、『リズムで学ぶ日本語』などである。各クラスは、4－6回程度で構成され、パイロット的な活動が試みられた。クラスの提案書の一部を資料3に、各クラスのインストラクターと受講者の声を資料4にあげた。写真6はインストラクター募集にあたって開催した説明会の様子である。また、グループ・レッスン終了後には写真7のようにアフターセッションとして、インストラクターたちがあつまって打ち合わせをする姿、インストラクターと受講者が話しこんでいる姿や、食事をしに行く姿などが見られた。

写真6：インストラクター説明会



写真7：アフターセッションの様子



3.3 個別対応のレッスン

個別対応のレッスンとは、受講生が5名未満で、謝金は支払われないクラスである。日程の都合などでグループ・レッスンには参加できない受講生のために、インストラクターの好意により開講されている。

4. おわりに

2010年10月より、試行錯誤しつつ始められたイブニング・コースも、3ヶ月を終えようとしている。当初、「低コストで、随時、多くの学生を受け入れる」ことを目的として開始されたが、その役割を果たしてきたと思われる。このような活動を恒常的に維持するには、1) 予算、2) 場所の確保、3) 事務サイドによる時間外の支援が必須事項であると考えている。正規の時間外のコースである以上、正規コースと同様の効果や規則を科すことはならない。そこに求められるのは、柔軟性である。重要なのは、受講生

とインストラクターの間に、硬直したクラス運営を課すのではなく、お互いに希望や条件などを出し合って、柔軟なクラス開講をめざす、そのために、現在では、月曜日から金曜日までの連日、17時から20時の間に、教室を提供したり、教材コピーなどの支援を行っている。北海道の長い冬の、長い夜を、心身ともに健康に過ごすために、日本語を通じた国際交流の場が必要とされ、それは、大学が率先して設けるべきものであろう。

留学生に北大を選択した理由を聞くと、「父母兄弟が北大へ留学していた」という声も多い。「北大では家族を含めた留学生の日本語のケアが充実している」という評判は、必ずや「北大留学リピーター」の増加につながるであろう。ここで日本語を学んだ留学生の家族が、将来、正規の北大生となり、北大の国際交流推進に数的貢献を果たすことであろう。

注：

- 1) 一般日本語科目とは、北海道大学留学生センターが、学内の留学生・研究員のために開講している日本語補習コースである。初級は年4回、中上級は年2回、学生を募集しており、前者は8週間単位(クォーター制度)、後者は16週間単位(セメスター制度)のコースを運営している。
- 2) 日本語サロンとは、北大の女性教員・職員・および教員・職員の配偶者から構成される「北大国際婦人交流会」によって提供されるボランティア日本語教室である。
- 3) http://www.tappingtouch.org/jp/t_touch/index.htmlを参照した。
- 4) 2010年10月・11月に取り上げたのは、『カエルの歌』『森のくまさん』『大きな古時計』『バラが咲いた』『世界にひとつだけの花』『世界は二人のために』『上を向いて歩こう』『赤いスイートピー』『津軽海峡冬景色』『頭、肩、お腹、膝、足』である。

参考文献・参照URL

- 青木麻衣子・高橋彩(2009)「留学生サポート・デスク 一年の軌跡」『北海道大学留学生センター紀要』第13号pp.118-134
- 北海道大学留学生センター留学生指導専門委員会(2009)『北海道大学留学生学生生活実態調査報告書』

資料1 イブニング・コースのちらし10月用（英語版・中国語版）

Japanese Evening Course
Let's enjoy Japanese Now!



Time: **TUE&FRI**
10/15 10/19 10/22 10/26 10/29
60min / 18:00~20:00 (upon request)

Place: International Student Center / Clark Center

Learners:
International Students of Hokkaido University
and their **FAMILY** (babies are welcome)

What will we learn?

😊 We are planning various classes upon learners' request. 😊

Contact: yama@isc.hokudai.ac.jp

日语讲座

让我们一起快乐地学习日语！

时间: 星期二或星期五
10/15 10/19 10/22 10/26 10/29
60分钟 / 18:00~20:00
(根据大家的时间具体安排)

地点: 留学生中心或克拉克会馆
对象: 北海道大学的留学生及家人
(同时欢迎小朋友们的参加)

具体都学些什么呢?

😊 根据大家的需求安排课程 😊

联系方式: 山下 yama@isc.hokudai.ac.jp

資料2 「日本語イブニング・コース」インストラクター一覧

	氏 名	所 属
1	高 泉 拓	大学院文学研究科・博士後期課程
2	木 村 友 樹	医学部保健学科・学部生
3	上 林 彰 仁	理学院・修士課程
4	谷 口 博 子	学外
5	掛 川 恵梨子	工学部・学部生
6	石戸谷 哲	文学部・学部生
7	宮 本 菜 美	教育学部・学部生
8	細 野 弥 恵	学外
9	深 川 暁 音	教育学部・学部生
10	木 村 香 菜	教育学部・学部生
11	金 モウン	留学生センター・研修生
12	大 野 修	学外
13	邱 林 燕	留学生センター・研究生

調査日：平成22年12月14日
調査者：上林彰仁（大分県立総合文化センター 学芸員）

	イブニング・コース クラス編	
クラス名	やさしい日本語のうた	
内容	心づかいが大切 日本人の文化を覚えたい人、日本語で歌を歌いたい人 クラスの目標 ① 日本語の歌を歌うこと、日本語の歌を聴くこと ② 日本語の歌を聴くこと、日本語の歌を聴くこと ③ 日本語の歌を聴くこと、日本語の歌を聴くこと	
特徴	① 日本語の歌を聴くこと、日本語の歌を聴くこと ② 日本語の歌を聴くこと、日本語の歌を聴くこと ③ 日本語の歌を聴くこと、日本語の歌を聴くこと	
施設・手段	※ 日本語の歌を聴くこと、日本語の歌を聴くこと ※ 日本語の歌を聴くこと、日本語の歌を聴くこと ※ 日本語の歌を聴くこと、日本語の歌を聴くこと	

邱林燕、石戸谷 哲

	イブニング・コース	クラス編成
クラス名	中四人の在りて日本語	
内容	・日本人が日本へ来 たとき、カクナを勉強しては、中国語とか フランス語の知識 ・ウラナシの知識 ・師妹と協力しに行う。身元は先生に 支払った金で支払う。金は表現は自己 紹介から始まる。買ひ物をするので日常生活 で使ふ表現を教える。 次、金午後6時半から8時までは	
担当	田中 久美子	(A)、(B)、(C)、(D)

[illegible]

イブニング・コース クラス **授業** Monday and Wednesday

[illegible]

イブニング・コース クラス ~~授業~~ Tuesday and Friday

[illegible]

イブニング・コース クラス

[illegible]

映画で学ぶ日本語表現 (Learning Japanese Expressions by movies)

[illegible]

1. 1995年 2. 1996年

※：留学生センター 申請期間中

級：初級者から中級者 (5名から10名程度)

※この展覧では、映画を通じた日本画の草紙、紙画、空想演義の草紙を

易としています。ある作品を4冊に分けて鑑賞しつつ、日本語を学習します。

「（中略）、（中略）、（中略）」と繰り返して読んでいます。ですが、よりよく理解して

▲主文：……

らうために英語でも説明します。異訳付の教材を配布します。

中定

72、10/29、11/5、11/12 宮崎駿監督『となりのトトロ』
79、11/27、12/4、12/11 宮崎駿監督『千と千尋の神隠し』

伊丹十三監督『タンポポ』 - - 1/72

one every Friday 6:30-7:30pm.

see: Middle room 2 in International Student Center
beginners and the intermediate (From 5 to 10 students)

This class focuses on Japanese words, phrases and conversational expressions in

In a class, explanations, questions and answers are basically in Japanese. However, I

plain in English for better understanding too. Tests with English translation will be distributed to students.

120, 11/27, 12/4, 12/11 "Diplotted away" (Hayao Miyazaki)

12. 214, 215, 216, 217 - Temporal (Time) - 1/n

資料4 受講者とインストラクターの声

1. 『中国人のための日本語』



受講者の声：

「楽しいです。たくさん新しい単語を知りません。そして、単語を覚えやすい方法を教えてください。」

「おもしろいです。日本語の文法は難しいです。聞き取り練習したいです。」

「先生はおもしろいです。たくさん手伝ってくれます。(イブニング・コースは) 試験とかプレッシャーがないです。」

「たくさん留学生と会う。色々な国の友だちができる。先生は、親切です。元気です。おもしろいです。」

「自分でクラスを選ぶことができる。自由でいい。」

「1時間は長いので、途中で休み時間がほしい。」

「自分の母国語で、日本語を勉強するのは楽で楽しい。(一般日本語コースの) 復習としてももっと理解できる。」

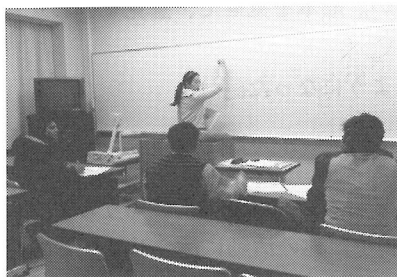
「ロビーのクラスで、もっとたくさんのゲームをしてほしい。ゲームとか遊びながら勉強したい。」

インストラクターの声：

「日本語の数字から発音を練習するのは覚えやすいのいいと思います。簡単な日本語の歌を歌って、仮名を勉強するのもおもしろくて覚えやすいと思います。中国語で学生さんに文法を説明するのは、自分の理解も深まるし、学生さんの質問で考えさせられ、考える機会 (になっている)。イブニング・コースは、他の日本語クラスと比べて、宿題もないし、テキストもないです。学生が圧力のない自由な雰囲気です。」

「いろいろな授業が提案されましたが、参加する学生があまり多くないようです。それに一度授業に参加しても、自由にクラスを変える学生がいますので、対象が不安定になるという点が教える方にとってはちょっと困る点です。」

2. 『ひらがなカタカナ書き方教室』



インストラクターの声：

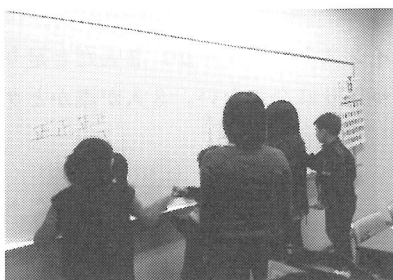
「誰でも参加できる点（がいい点）。
お子さんがいても参加できること、
普段、学生さんは日本人とふれ合う
機会が多いと思いますが、ご家族の
方はなかなかチャンスがない方も多
いと思うので、その方も参加できる
すばらしい場だと思います。またイン

ストラクターとして教える機会を与えていただくことは、単なるサポーターではなく授業を持つ責任が発生するので、その継続により生徒さんとインストラクター双方により良い影響を与えあっていると思います。」

「小さなお子さんがいる方に、日中にも（クラスを）ひらいてほしいと言われました。出たい授業が重なっている場合、他の曜日に代替クラスがあったら、と言われました。」

3. 『小学生クラス』

『学期途中で帰国する子どもの送別会』



受講者の声：

「（イブニング・コースは）何もおもしろい。好き。（難しいことは）ありませんよ。（学校では）国語、難しい。漢字、好き、ひらがな嫌い。」

「学校で6年生の漢字、難しい。（イブニング・コースでは）だいじょうぶ。」

「（イブニング・コースは）おもしろい。漢字、ちょっと難しい。（イブニング・コースで出される）宿題、全部、花丸。」

受講者（保護者）の声：

「すばらしい。絵本があればもっといい。絵本を見せて、意見を言わせればと思っている。」

「役に立つ。漢字、読めます。話せるようになった。」

インストラクターの声：

「インストラクター同士が仲良くなれている。他学部の人と知り合えてよかった。（イブニング・コースでの活動を）他の活動に活かしている。教えることとして、役に立っている。」

「人が減ってきている。日本人インストラクターは減っている。」

「週1、2回ではどうしてもない部分がある。どうがんばっても、サポートできない部分がもどかしい。そこが自分の課題。」

「自分が子どもに教えるとは夢にも思っていなかったので、クラスが持てよかった。（教育実習に行った経験があるが）日本語を教えるのは違うけど、教えるのはおもしろいと思いつけた。（イブニング・コースは）自由にやらせてくれるので、いい。（子どもたちは）宿題を出すと、毎回、ちゃんとやってくる。それがこちらとしても嬉しい。それで、花丸を求めてくる。」

「（子どもたちは）三者三様なので、（インストラクターが）2人だと足りない。マンツーマンじゃないと、つきっきりになれない。3人が誰かとケンカしている。」

4. 『リズムで学ぶ日本語』

インストラクターの声：

「日本語の学習を通じて、日本人と外国人が交流する機会にもなっていたので、いいと思った。初めて外国人に日本語を教える機会に恵まれたので、とてもいい経験になった。留学生や研究員が家族と一緒に参加できるので、いいと思った。」

「各インストラクターが、外国人のニーズを踏まえ、教科書に限定されず独自に工夫した授業を提供していたので、他の日本語クラスとくらべてバリエーションが多いという印象を持った。」

5. 『やさしい日本語の歌』



インストラクターの声：

「日本語を教えた経験がない自分(理系の教員免許所持者で、非常勤教員の経験あり)でもインストラクターになれて嬉しい。ただ、その立場に甘んじているわけではなく、プロの先生の日本語のクラスを見学して基本のHow toを学び、(日本語クラス

の教具にヒントを得て実際に作成したフラッシュカードを見せる)それを自分のクラスでも実践している。今まで話したことのない国の人(アフリカ・東南アジア・ヨーロッパ)とも話せる。」

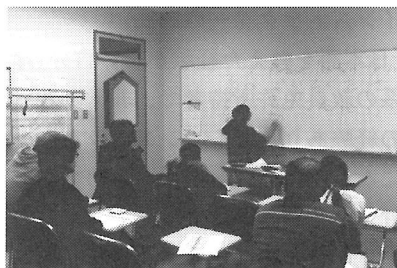
「プレ・クラスのある火・金曜にいろんなクラスが集中しすぎていて、生徒さんたちの選択の自由が狭まっている。そのため、現在の自分のクラスは月曜に行っている。プレ・クラスのない日に行うメリットはもうひとつあり、プレ・クラス後に飛び入りで来る学生が多いので、前からクラスにいる学生と反応が違い、そのバランスをとるのが難しい。リピーターを大切にするという方針から、プレ・クラスのない日に開講している。」

「(ひらがなを読めるという自己申告の受講者でも五十音表は読めるが二カ以上が組み合わせさって単語になると読めない人がいるので、)一つのクラスに集う生徒さんたちのレベルがばらばら。インストラクターとしてそれが一番の悩み。」

6. 『会話クラス』



7. 『個別対応のレッスン』



インストラクターの声：

「留学生もインストラクターになることができ、いい学習の機会でした。いろいろ学ばせて頂いております。」

「長続きしないインストラクター・学習者がやはり沢山いるようなので、何らかの対策があればいいなと思いました。たとえば、プレ・クラスに入るときに、試しなのか、継続的に来るのかをはっきりわけたほうがいいのではないかと思います。」

「自由な雰囲気で、出たい授業に出られるのがいいんですが、正規の授業と違って、ややゆるい部分があるのも仕方がないと思います。」

「様々な国の留学生と接することができた。レベルも色々なため、教えるにあたり良い経験となった。(コースに) 指針がないので、どうやって教えるかは(インストラクターに) 任される。手探り、手探りですべてをした。」「中途で入って来る受講者のレベルが違うので、とまどった。画一的ではないので、面白いと思う。反面、どこまで習得できるかはわからない。」

受講者の声：

「朝のクラス(一般日本語)には忙しくて出席できないが、イブニング・コースなら、少し時間があるので参加できる。(イブニング・コースが) 週3～4回あるといい。朝のクラス(一般日本語)は、システマティックだが、スピードが速すぎる。イブニング・コースのようにゆっくりやってほしい(できればシステマティックに)。日本人は、主な単語を1～2語言えばわかるので、単語とコミュニケーションをゆっくりやってほしい。」

「問題点は特にないと思う。インストラクターの負担が大きいので、たぶん難しいと思うが、週に3～4回開講されていたらもっとよいと思う。」

「普通体（カジュアルな会話）になれるために役に立つと思います。インストラクターと友達になりました。」

「私が参加している日本語会話コースは、自分の会話力を伸ばすためにとっても役に立つと思います。特に、新しい言葉を覚えました。」

「掲示板で（イブニング・コースのことを）知って、参加している。一般日本語も受講しているが、専門科目もあり（午前中は）忙しいこともある。イブニングは時間があり、参加しやすい。ここでは、日本語だけでなく文化など、多くのことを学んでいる。映画クラスや歌や音楽などで学ぶことができた。今は（イブニング・コースのクラスは）週2回だが、3回あったらいい。」

やました よしたか（留学生センター教授）

ほんま じゅんこ（留学生センター非常勤講師）

たなか さとみ（留学生センター非常勤講師）

Mid-term Report of the Hokudai Nihongo Evening Course

YAMASHITA, Yoshitaka, HOMMA, Junko and TANAKA, Satomi

Hokkaido University Nihongo Evening Course was designed for all the international students and researchers and their families who want to learn Japanese. This course is characterized by its flexibility of the schedule and course design. There is no placement test, no fixed textbook, nor homeworks. Its instructors are not professionals, but volunteers.

The Evening Course consists of "Pre-class", "Individual Class" and "Post-class Sessions". All students participate in the "Pre-class" to begin with. Afterwards, they can choose an "Individual Class", based on their needs or interests. Each "Individual Class" has more than 5 students and continues for three to five weeks. After finishing their language classes, students can also enjoy "Post-class sessions", talking with Japanese people.

The course has been so popular that more than twenty students have always been participating in the activities. We believe this course's system can serve as a model for other voluntary based Japanese language courses, because we accept new students at any time, and students can join whenever they want.